

加えさせていただきました。以上です。

李

ありがとうございます。それでは、お二人の本学の先生からの講演を終わりまして、本日の第一部は終わりとなります。この後、準備もありますので、休憩五分で、次の第二部を再開したいと思えます。それで、学生で参加している者は、四限目に入りますので、三限、四限連続になります。学生諸君も四限目はどうしても抜けなければいけないという人を除いて、基本的にこのまま出席してください。それと、四限目の途中に抜けなければいけないという学生の場合も、今から、学外からご講演に来てくださったお二人の先生と、三人目にまた本学の柴田先生のお話がありますので、柴田先生のお話が終わるまでは、必ず出席しているようにしてください。よろしいですね。では、今から五分間休憩とさせていただきます。

(休憩)

第二部 基調コメント

李

それでは、そろそろ時間がまいりましたので、第二部に入っていきたいと思えます。最初は、大阪大学言語文化研究科准教授の今岡良子先生からお話をいただきましたと思います。先生は、大阪府堺市のご出身でございます。中学のときにチンギスハンの生涯を描いたドラマに魅力を感じて、大学でモンゴル語を学ばれました。それから、二十年前から毎年モンゴルのごビ砂漠に通い、遊牧民の暮らしぶりの変化を研究で追っておられています。ご主人はモンゴル人の方だそうです。ちょっと新聞から紹介させていただきました。それでは、よろしくお願いいたします。

『モンゴルの社会と女性の活躍』

今岡良子（大阪大学言語文化研究科准教授）

皆さま、こんにちは。

栗屋先生が途上国に学ぶと書いておられますが、私はずっとモンゴルに学んできました。若い皆さんにまず最初に話しておきたいことは、経済が発展しているからといって、それは人間の発達とイコールではないということです。技術が発展したからと言っても、人間が発達するというわけではありません。

せん。私は、私たちが日本の発展の代わりに失ってしまった能力をモンゴル人の中に再発見し、それに引かれるように研究を続けてきました。

さきほど、ジェンダーの話がありました。ジェンダーのレベルでも、数字で日本とモンゴルの違いが相当大きく出てきていましたが、日本の男女平等のレベルはモンゴルより十五年くらい遅れていると思います。

例えば、こういうことがあります。留学生が日本に来て、日本語を勉強するときに、学校では「お父さん」、「お母さん」という言葉を習いますが、家庭では「おふくろ」、「おやじ」と呼ぶことにどういう意味だろうと疑問に思います。「おふくろ」などという言葉は、日本語学校の教室では習いませんから、どういう意味ですか？と聞いてきます。「おふくろ」というのは子宮のことです。「おやじ」というのは、親としての権利を持つ父であるということです。モンゴル人は大変ショックを受けます。日本ではお母さんのことを臓器の名前で呼ぶのか、と。街に出たら、もっとびっくりします。地方から大阪にやって来た学生とどこで食事をしようかとお店探し、のれんには、「おふくろの味」と書いてあります。「子宮さんの味」モンゴル人はびっくりするのです。母親を臓器の名前で呼んでおいて、しかし、その言葉で癒されている。「日本の女性の地位は植民地のレベルなのか？」と言います。

私たちは女性差別を差別であることに気付かないほど、文化として馴染んでいるわけです。これを気づかせるにはとても時間とエネルギーが必要で、教育の場から解決しなければなりません。モンゴルは、一九二一年に社会主義国になるまで、清朝支配下の封建制度の下にありましたから、封建的な身分による差別、民族による差別、性による差別がありました。革命後、平等な社会を実現する

ため、抑圧されてきた人たちの解放に力をいれました。差別を制度としてなくすだけでなく、意識の中からなくすために、言葉の使用を禁止しました。今、モンゴル人が話すモンゴル語の言葉の中で、女は「こういう言葉を使つてはいけない」とか、男は「こう言います」ですという規則はありません。男も、女も同じ言葉が使えます。へりくだり、献上したりという言葉使いがありません。私たちが学生にモンゴル語を教えたら、そのまま、その言葉をモンゴルで使えます。英語の社会でも、女性はどう言うべきという話し方がありますが、モンゴル語にはありません。日本では憲法が平等を保障していますが、私たちの意識や文化の中に潜在する差別を意識的にたたき出さないと、なかなか出て行かないのではないかと思います。

それから、さっきのレジユメの中にも、社会の歪みという言葉がありました。モンゴル人留学生が日本の家庭にホームステイしてびっくりするのは、どうして日本の子どもはお母さんを虐待するのか？ 何でもお母さんにさせる。子どもであるにもかかわらず母親を奴隷のように使う。父親も何でもお母さんにさせる。お尻を拭けとまでは言わないけれども、料理、洗濯、掃除、ごみ捨て、何でも母親にさせる。モンゴルでは、子どもたちは、親のしていることを見て、助けたいと思い、自分から手伝って、身につけて、自分でできるようにしようとします。家族としての仕事を覚えて、親を安心させて、早く大人になろうとします。男の子も家事を身につけますから、結婚して夫になると、妻といっしょに家事をします。もちろん、妻も夫の力仕事を助けます。家の中でお兄ちゃん、お姉ちゃんが一番よく働いていて、お母さんはゆったりしているというイメージが、モンゴル人の心のふるさとであり、癒しの風景です。しかし、日本では、お母さんが家庭の中で一番しんどく、汚い仕事を引き受ける存

在です。また、これが当たり前として育った女性も「お母さんだから」とか、「妻だから」とか、「嫁だから」と忍耐することに馴れていくと、自分からいろんなことを引き受けて、「いいお母さん」、「いい妻」、「いい嫁」の評価をえようとします。犠牲になることで、家庭の中でいい位置に占めるわけです。すると、ますます差別が見えなくなってしまう。外国人が見ると、びっくりし、日本人にはわからない、ということになります。

私の専攻のモンゴル語の学生は、モンゴル人と接しながら、議論しながら気づいていきます。ああ、自分が当たり前で育ってきた二十年間の中で、こんなに生活の中の嫌なこと、例えば、トイレを掃除するとか、ごみを出すと、ごみの入れ物を洗うとか、そういう汚いことを全部お母さんにやらせていたなということに気がついていきます。それに気が付いたら、社会全体の中で、そういうしんどくて、汚いといわれる仕事は誰に押し付けてきたのかと考えるようになります。外国研究をする上で、大事なのは、見えてこなかったことが見えるようになる、ということだと思います。モンゴルというのは、そういうことを私に教えてくれる地域です。

今日は、時間も短いので、モンゴル女性という大きな話はやめておいて、私が七歳のときから知っているハンドという女の子の話をします。ハンドは子どもころ、遊牧社会で育ちました。

〈写真1 遊牧民の天幕ゲル〉

これがゲルです。一つの家族、お父さん、お母さん、子どもたちが暮らします。生きて行くのに必要なことを家族で行ないます。

まず、川や泉、井戸などの近くにテントを張ります。飲み水、料理用の水、洗濯や掃除用の水を汲



写真1 (巻頭にカラー写真)



写真2



写真3

んできます。冬は雪や氷を運んで来て、溶かして水にします。

〈写真2 一日二回、下の小川から水をくみます。子どももついて行き、道を覚えます〉

暖房や料理に使う燃料を集めます。枯れた木を切ったり、牛糞を一年間乾燥したものを使ったりします。羊、山羊、牛、馬、らくだなどの家畜を育てます。

〈写真3 燃料用の枯れた木を集めています〉

太らせた家畜は、家族が食べる分、屠殺します。皮を剥ぎます。皮でひもを作ります。メスが子どもを産んだら搾乳します。搾乳したら、ミルクを殺菌して、ミルクの成分を細かく分類し、乳製品を作り、保存します。羊毛でフェルトを作り、ゲルという天幕の内壁に使います。このように暮らして

かかわることを全部家族で行ないます。

〈写真4 左の女の子がハンド 生まれた羊にミルクを与えています〉

一番最初に大気汚染のお話がありました。本来、遊牧社会はゴミを出さない社会ですので、汚染という言葉には違和感がありました。物質の分子レベルではゴミが出るということになるのかな、と思いました。さきほどぜんそくの原因のところにも挙げられていたのですが、遊牧民は牛の糞を一年間乾かし、草の繊維だけが残ったものを燃やして、暖房に使っています。家畜が生み出す畜産物のレベルというと、糞も利用して、ゴミを出さずに暮らしています。私にはそのにおいはあまり気になりません。むしろ、ウランバートルに帰ってくると、石炭のにおいがむっと鼻の中に入ってくる感じがします。田舎では乾燥した家畜の糞を燃やしても、空気が悪いなという思いをしたことがあります。人口が少ないからでしょうか？

遊牧民の少女七歳のハンドは、赤ちゃんのお守り、薪運び、水くみ、ミルクの殺菌、馬頭酒の攪拌、放牧、子羊や子山羊の世話、お客さんへのお茶出しなど、生活に必要なこと、判断力を身に付けていました。物を作り、消費するだけでなく、処分して無くしてしまうところまで見て、自分でできるようになっていきます。最初会ったころのハンドは、写真のように小さかったのですが、県都で今度は高校生になって、大学は大変難関の国立科学技術大学の水利工学部というところに入ります。その後、



写真4

ウランバートルの水道局に勤めて、今は一児の母です。さらに専門性を高めるために、チャンスがあったら国費の留学生になって、日本で勉強したいと思っています。もしかしたら四日市大学に来るかも知れませんね。

子どもの頃に生活力をしっかり身に付けて、学校ではもっと大きな視野で考え、専門性を高めていきます。卒業して、結婚して子どもを持っても、自分の夢をあきらめずに生きることができるのが、モンゴルの社会のいいところです。あとで報告するエネビシさんもそうなのですが、なぜそれが可能なのかというと、家族や親戚が支えるからです。小さいときから自分の身の回りの生活のことをするだけじゃなくて、大人との関わり、近所の共同体との人間関係をどう作るかということに身に付けてます。それが今度は自分が何かを実現しようとしたときに、助けてくれる力になります。日本の社会では、結婚したから、子どもができたから、いろんな夢をあきらめるよう周囲が説得してきますが、モンゴルでは常に家族や共同体がしっかり支え、お金をあちこちから借りてでも実現するように協力してくれます。そういう自立性の高い遊牧社会にルーツのある女性たちが、今、首都ウランバートルで多く暮らしています。自然保護活動に熱心な人に出身を聞くと地方出身の人が多くいます。ハンドの場合は、今はウランバートルに住んでいます。田舎とのつながりがまだあって、将来はこのまま労働者として生きる道、帰郷して遊牧民として生きる道、両方選択できる状態にあります。これはとても素晴らしいことだと思います。

〈写真5 首都で暮らしているハンド〉

それから時間がなくなってきたので、データも紹介しますが、遊牧民というと、流浪の民のようなイメージがあるかもしれませんが、実際にはモンゴルの成人人口で考えたと三十三万人いて、仕事をすることのできる、経済活動の可能な労働人口が一一五万人ですので、三人に一人は遊牧民です。その三人に一人の遊牧民が、二人の働く人を支えているということが、モンゴルの強みになっています。職種別にしても、三十三万人というのは一番多くて、車両整備士の十五万人よりも倍いるわけですね。この三十三万人の半分が女性であるということです。

遊牧民の数は減っていると、報道されることがありますが、実際には増えていきますし、家畜も増えていきます。遊牧民の暮らしは向上しています。遊牧民戸数は一六万戸ありますが、これはさっきのゲル地区のウランバートルの人口と戸数があまり変わらなくなっていますが、ほとんどの家は太陽光発電を持っていますし、車も四戸に一戸持っています。二〇一三年はカシミヤが非常に高かったので、だいたい二五頭ヤギを飼えば、公務員の平均賃金と同じぐらいの収入が得られたようです。

ですから、私はモンゴルの社会問題や環境問題を解決していくときに、このポテンシャルのある遊牧民やそこにルーツのある自律性の高い人が主体的に参加して、手足を使って解決するように導けば、まわりにいる人たちも協力し、いろんなことが解決できると思います。ウランバートルに人口が集中



写真5

しているという報告がありました。首都の人口を分散して、地方で遊牧生活をしながら、もっと快適な暮らしができるように導けば、解決できると思います。ウランバートルは大変美しいのですが、これもソ連の援助によって成り立った、モンゴルの生産力では持続不可能な都市です。そのうちに行き詰るので、早いうちに地方分権化した方がいいと思っています。

ちょっと途中ですが、これで一旦終わります。

李

今岡先生、どうもありがとうございました。それでは、引き続きまして、トルガー・エネビシさんのお話をお願いいたします。エネビシさんのご紹介を、栗屋先生の方からお願いいたします。

栗屋

エネビシさんはモンゴル人ですが、現在、名古屋大学で研究生として留学しておられます。以前、二〇〇五年に大阪外国語大学で日本文化の授業を受け、そのときに今岡先生と会われ、以来深い師弟関係が続いています。それからモンゴルに戻られ二〇〇七年以降、先ほどちょっと紹介しましたジェンダーセンターの活動に参加され、更にそこからできたTCDCに拠点を移されて、モンゴルにおける地域住民の啓発活動をテーマに活躍しておられます。よろしく願います。